

第113回 定期演奏会

PROGRAM

ベートーヴェン:「エグmont」序曲 op.84 (約10分)

Ludwig van Beethoven: Egmont, op.84: Overture

シューマン:ピアノ協奏曲 イ短調 op.54 (約30分) ★

Robert Schumann: Piano Concerto in A minor, op.54

第1楽章 アレグロ・アフエットウオーソ *Allegro affettuoso*第2楽章 間奏曲:アンダンティーノ・グラツィオーソ *Intermezzo: Andantino grazioso*第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ *Allegro vivace*

— 休憩 (20分) — Intermission

ブラームス:交響曲 第1番 ハ短調 op.68 (約45分)

Johannes Brahms: Symphony No.1 in C minor, op.68

第1楽章 ウン・ポコ・ソステヌート - アレグロ *Un poco sostenuto - Allegro*第2楽章 アンダンテ・ソステヌート *Andante sostenuto*第3楽章 ウン・ポコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ *Un poco allegretto e grazioso*第4楽章 アダージョ - ピウ・アンダンテ - アレグロ・ノン・トロppo、マ・コン・ブリオ
*Adagio - Più andante - Allegro non troppo, ma con brio*指揮:クラウス・ペーター・フロール *Claus Peter Flor, Conductor*ピアノ:クレア・フアンチ *Claire Huangci, Piano* (演奏曲★)管弦楽:兵庫芸術文化センター管弦楽団 *Hyogo Performing Arts Center Orchestra*

2019 3/15(金)・16(土)・17(日) 3:00PM開演

兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催:兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

助成:

文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会これさえ
見れば
わかる!

今回の聴きどころ

東条 碩夫(音楽評論家)

ドイツ音楽の巨匠3人が登場

ベートーヴェン、シューマン、ブラームス——と、「ドイツ最大の作曲家群」が並ぶプログラムは壮観であろう。ベートーヴェンは、今日は短い序曲だけだが、この「エグmont」は、昨年10月定期で聴いた「コリオラン」とともに、彼の11曲ある序曲の中でも特に緊迫感に満ちた、極めて優れた名曲である。

その「エグmont」の音楽が初演された年に生れたシューマンは、「ロマン派音楽の詩人」と呼ばれるほど、みずからの繊細な感情を音楽に反映させた大作曲家だった。今日演奏されるのは、彼の唯一のピアノ協奏曲。決して派手な曲ではないが、聴くほどに心に沁み込んで来る美しさを備えた作品だ。

そして第2部は、ドイツ・ロマン派の交響曲の最高峰、ブラームスの「1番」。最初は渋く、最後は明るく、落ち着いたある精妙な叙情と、重厚壮大な風格にあふれた傑作である。ベートーヴェンのある交響曲にそっくりな主題が出て来るところも楽しみであろう。

必聴POINT

ライター
おすすめ!!

ベートーヴェン:「エグmont」序曲 op.84

《シンプルな構成だが力感は凄い》

オランダ独立運動の志士を主人公にした内容に相応しく、曲は劇的な迫力に満ちている。重々しいが緊張度の強い序奏に、テンポを速めての緊迫した主部が続く。そして、ベートーヴェンならではの圧倒的な力にみちた勝利の終結部へ。

シューマン:ピアノ協奏曲 イ短調 op.54

《シューマンならではの叙情的な美しさが聴きもの》

両端楽章はアレグロ(快速)のテンポながら、どこかに美しい寂寥感を滲ませるところが、シューマンの個性であろう。第2楽章中間部でチェロが大きく息づくように奏する旋律は、彼のロマン的美学の面目躍如。

ブラームス:交響曲第1番 ハ短調 op.68

《「第9」そっくりの主題はベートーヴェンへの讃歌》

緊迫した精神の闘争を思わせる第1楽章から、安息の第2楽章と、落ち着いた第3楽章を経て、不気味な雰囲気第4楽章序奏へ——だがホルンの朗々たる主題の登場を転機に、曲は高らかな歓呼に向かう。実に壮大なシンフォニーだ。

PROGRAM NOTE

曲目解説 —
演奏をより深く楽しむために
東条 碩夫(音楽評論)



ベートーヴェン:「エグモント」序曲 op.84

初演:1810年6月15日 戯曲上演とともに演奏 ウィーン

独立を目指し闘った英雄の精神的勝利

16世紀後半、スペイン支配下の圧政に苦しむフランドル(オランダ南部等の地域)の領主エグモント(オランダ語ではエフモント)伯爵は、独立運動の指導者として戦い、敗れて処刑された。この歴史上の事件を基に文豪ゲーテは戯曲を書いたが、そのウィーン上演に際して付随音楽の作曲を依頼されたのがベートーヴェンであった。

彼は1809年10月から翌年6月までの間に、10曲からなる劇音楽を作曲した。あの有名なピアノ協奏曲「皇帝」などの作曲から間もない時期のことである。ゲーテに対する強い敬愛の念(2人は1812年に初めて対面する)からこの曲を書いた、と彼は言うが、その背景にはもう一つ、当時ナポレオン率いるフランス軍に占領されていたウィーンの解放を願うベートーヴェンの愛国精神の発露があったのではないかと見る説もある(注1)。

劇の終結近く、エグモントを愛しつつ自ら命を絶った女性クレールヒエンが、女神の姿で獄中の彼の夢に現われる。勇気づけられたエグモントは、自らのあとに続く者たちを信じ、



作曲家プロフィール ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)
Ludwig van Beethoven

ドイツ最大の作曲家のひとり。ボンに生れ、青年時代以降はウィーンで活躍。聴力を失うという悲劇を乗り越え、全人類的な理想に燃えた英雄的な作品を数多く世に送り出した。特にその9曲の交響曲、32曲のピアノ・ソナタ、16曲の弦楽四重奏曲は、音楽史における不滅の金字塔であり、演奏家にとって聖書のような存在と言われる。1845年、ボンに記念像が建設された際、「彼には墓前で泣く妻も子もいなかった。だが世界が泣いた」という言葉が贈られたのは有名な話。

「友たちよ、勇気を持って!君らの背には親が、妻が、子がいるのだ。君らの最愛の宝を守るために命を賭ける!今その先頭に私が立つのだ!」と叫んで敢然と処刑台に向かう。ここでオーケストラに爆発するのが劇的な「勝利の交響曲」で、この序曲の終結部に先取りされている勝ち誇った音楽がそれである。

楽器編成

フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

(注1) ニューグローヴ世界音楽大事典第8巻 講談社刊

シューマン:ピアノ協奏曲 イ短調 op.54

初演:1846年1月1日 ライプツィヒ

ロマン派の真髓、詩的なピアノ協奏曲

クララ・ヴィークとの熱烈な恋愛の結果、ついにめでたく結婚を果たしたロベルト・シューマンは、あふれる創作欲の中で、翌1841年の5月20日に「ピアノと管弦楽のための幻想曲」なる作品を完成した。これが、のちにこの「ピアノ協奏曲」の第1楽章となる曲なのである。これは同年8月13日に、名ピアニストだったクララの演奏によりライプツィヒで試演されたが、この年の彼は、専らオーケストラ曲に関心が向いており、「交響曲第1番《春》」や、現在の「第4番」の初稿などの作品を次々に作曲していくという状況だったので、「幻想曲」の方は、さしあたりそのままになった。

だが1845年になり、メンデルスゾーンのパiano協奏曲を聴いて刺激を受けたロベルトは、自分もぜひ協奏曲を——と思いはじめたのであろう、前述の「幻想曲」を3楽章形式の協



作曲家プロフィール ロベルト・シューマン(1810-1856)
Robert Schumann

ドイツのツヴィッカウ生れ、ドイツ・ロマン主義音楽を代表する作曲家のひとり。情感豊かな叙情美、陰翳の濃い曲想で聴き手を魅了する。とりわけ歌曲とピアノ曲は、音楽史上に傑出した存在だ。30歳を過ぎた頃から精神の病に悩まされ、一方でデュッセルドルフ市音楽監督などの公的要職を務めたものの、最後はボン近郊の精神病院で生涯を閉じる。批評家としても一流で、ショパンやブラームスを世に紹介することにも力を入れた。

奏曲に発展させるべく、新しく2つの楽章を書き上げて、それに加えたのであった。その際に、「第1楽章」にもかなり改訂の手を加えたことはもちろんである。かくて完成したこの新しい協奏曲——その全曲を弾いて初演したのも、やはり愛妻クララであった。

それは美しい夫妻の共同作業ではあったが、そこに忍び寄る暗い影から目をそむけるわけにはいかない。この頃すでにロベルトには、宿命的な病となる「鬱」の症状が起こっていたのである。

楽器編成

フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

ブラームス:交響曲 第1番 ハ短調 op.68

初演:1876年11月4日 カールスルーエ

大先輩ベートーヴェンへの畏敬の念

着想から完成まで、およそ21年を要した大交響曲。それだけの年月がかかったのは、ベートーヴェンを敬愛することでは並外れていたブラームスが、その偉大な大先輩のあとに交響曲を書くことの困難さを、はっきりと認識していたからであった。推敲に次ぐ推敲を重ね、思いつくさまざまな曲想をすべて取り入れ、精緻に練り上げた感のあるこのシンフォニーには、ブラームスの気負いと情熱が窺えるだろう。

こうして出来上がったこの作品は、ベートーヴェンの9つの交響曲に続く存在とまで言われ、高く評価されるものになった。当時の人から「ベートーヴェンの《第10》だ」と讃えられたのは、そのような理由からである。ただその一方、「この交響曲は極めて厳格で、しかも入り組んだところがあり、一般受けする効果を狙うようなところがまったくない」^(注2)と、ブラームスの友人であり、当時の有名な批評家だったハンスリックから指摘されたのも事実だった。——しかし今日では、この曲が「取りつき難い」どころか、最も親しまれている交響曲のひとつであることは、だれもが認めるところである。

滋味豊かな美しさ、雄大な風格

第1楽章の緊迫した序奏は、ブラームスがあとから書き加えたものであると言われる。悲

劇の幕開きのような、ものものしい壮大な音楽である。アレグロの主部に入ってから、その緊張感は続いていく。一分の隙もなくぎっしりと細かいモチーフで埋められながら、それらが少しもよどみなく起伏を繰り返しつつ滔々と流れて行くさまは、まったく名人芸の為せるわざである。

第2楽章での清澄透明なオーボエや弦の音色も美しい。また第3楽章には、如何にもブラームスらしい、落ち着いた愛らしさが感じられる。

そして第4楽章——アレグロの主部に入ってから最初に現われる第1主題は、昔から論議的だ。ベートーヴェンの「第9」の「歓喜の主題」を、だれにでも連想させるからである。ブラームスは、人からそれを指摘された際に、「馬鹿な奴は誰でも同じように聞くものさ」と言ったとか、「だれだってそんなことはすぐ判る」と言ったとか、いろいろな説があるが、要するに「だから何だというのだ」と言いたかったのであろう。

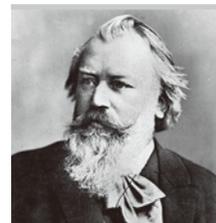
結局これは、彼が自己の最初の交響曲において、ベートーヴェンへのオマージュ(讃歌)を謳い上げたかったのだ、と解釈することが妥当であろう。しかも、この主題には「アレグロ・ノン・トロppo(過度に速すぎず)、マ・コン・ブリオ(しかし活気を以って)」という指定がある。「コン・ブリオ」こそは、ベートーヴェンが最も得意とした速度標語で、実に多くの作品で使用したものだ(ちなみにブラームスは、彼の交響曲では、この言葉は他に「第3交響曲」の第1楽章にしか使っていない)。

曲は、圧倒的な高まりの中に終る。

楽器編成

フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、コントラ・バスーン、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、ティンパニ、弦楽5部

(注2)日本ブラームス協会編「ブラームスの実像・交響曲初演評」音楽之友社刊



作曲家プロフィール ヨハネス・ブラームス (1833-1897)

Johannes Brahms

ハンブルクに生れ、ウィーンで没したドイツ最大の作曲家のひとり。ロマン派音楽時代の重鎮であると同時に、ドイツ古典派の伝統をも重視した作風で独特の地位を確立、交響曲、協奏曲、室内楽などに数多く不滅の名作を残した。華美なところは一切ないが、重厚雄大な風格の中に、真摯で温かい人間性をたたえた音楽で親しまれている。1853年秋にシューマン夫妻と初めて会い、厚遇を受けたが、ロベルトの死後にはクララ夫人との親交が芽生えた。